ダルニー奨学金、25年の挑戦

教育の光、貧困地を照らす

高層ビルが立ち並び、地下鉄やスカイトレインが街中を走るバンコクの景観から、途上国の首都をイメージするのはむずかしい。しかし、地方に目を向けると、都市部との経済格差はいっこうに縮小しない。なかでもイサーンと呼ばれるタイの東北地方は、総人口の3分の1を抱えるにもかかわらず、その大半が経済発展から取り残されてきた。「出稼ぎ者の里」と称されるこの地域が貧しさから抜け出るためには何が必要なのだろう。そう考えて「貧困に屈せず、自立するには教育しかない」と確信したのが、1987年に発足したダルニー奨学金だ。25年に及ぶ同奨学金の挑戦を3回に分けて伝える。【NNA主筆・大住昭】

バンコクから車で北上し、ラオス国境へと続く国道2号線をしばらく走ってから左折して脇道に入ると、アスファルト道路はでこぼこ道になっていた。大きく陥没したところもあり、運転は慎重にならざるをえない。スピードを落とし、前方で口を広げる穴の大きさを目で確認しながら、沿道にサトウキビやタピオカなどの農園が広がるなかをゆっくり進む。目指す学校に着くまでバンコクから3時間半ほどかかった。

イサーンの学校訪問

ダルニー奨学金を運営するタイの財団法人、地域開発教育基金（EDF）が5月末に企画した奨学生の学校および家庭訪問ツアーに参加した。訪れたバーン・ワン・ローイ・ノイ校は、イサーン南部のナコンラチャシマ県（通称コラート）の片田舎にある。1940年に開校した同校は、幼稚園と小中学校が一体となり、児童数は合わせて138人。ダルニー奨学金はこのうち、8人の中学生の就学を支援している。

小学生は緑、中学生は黄色の制服姿の子供たちは、部外者の登場に興味津々。日焼けした顔とまぶしいほどの白い歯をのぞかせながら、木造校舎の廊下を元気よく駆けていく。

チャムロン・ソンポン校長によると、コラート地域の学校でいえば同校の施設は中の下。児童数が少ないため政府からの補助金も限られ、食堂や図書室などを設ける余裕がない。また、悪路のために雨季になれば大きな水たまりができ、一部の子供たちは通学できなくなる。関係当局には繰り返し、「早く道路を補修してほしい」と要請している。

ダルニー奨学生の一人、デーン君（13）は、トタン屋根の小さなあばら家に家族5人で暮らす。両親は離婚して家計は日給200バーツ（約500円）の母親の稼ぎに支えられているが、母親はこのところ持病の糖尿病が悪化し、農場で働けない日が続く。頼みの綱は近くに住む親戚一家の出稼ぎ収入だが、昨年タイを襲った洪水が尾を引き、あまり当てにはできなくなった。工場の閉鎖や人員整理により、身内にも出戻り組が増えたからだ。

麻薬に手を出す子供

ソンポン校長は子供たちの生活環境について、「正直よくない。両親はバンコクなどに出稼ぎに行き、おじいさんかおばあさんと暮らす子供が多い。お年寄りは孫の勉強などに目が届かない。この地域でいま大きな問題になっているのは、子供たちが非行に走ったり、麻薬に手を出したりすることです」と話す。

デーン君の将来の夢は警察官になること。安定した収入の職につくことで、少しでも家計を助けたいと思っている。しかし、風通しが悪く、家族5人が寝起きするだけのスペースしかない狭い家には、勉強机など望むべくもない。エアコンは無論のこと扇風機すらなく、家のなかの家電製品といえば中古の小型テレビだけだ。

デーン君の母親によると、奨学金がなければ中学校に通わせるのは到底無理。奨学金は年間1,500バーツでしかないが、それでも大助かりという。デーン君に「学校は楽しい？」と聞くと、迷うことなく「はい」と答えた。友だちと会うことのできる学校は、デーン君にとっては厳しい現実からの避難先でもあるかのようだ。

女の子の名前から

ダルニーちゃん（小学校5年生当時）

タイでは数多くの非政府組織（NGO）が公的支援の行き渡らない分野で幅広い活動を展開している。教育関係でみると、世界中にネットワークを持つワールドビジョン、キリスト教団体のクリスチャン・チルドレンズ・ファンド（CCF）、生活保護家庭の児童や孤児たちを支援する子供財団（FFC）、スラムの子供たちの教育を推進するドゥンプラティープ財団、そしてダルニー奨学金を運営するEDFの5

Copyright(C) NNA All rights reserved. 記事の無断転載・複製・転送を禁じます

団体がなかでも大手といえそうだ。

ダルニー奨学金の特色は、支援地域をイサーンの20県に特定化し、対象を中学生に絞っている点だ。その発足にはこんなストーリーがある。

日本の一般財団法人・民際センター（秋尾晃正理事長、東京都新宿区）はタイＥＤＦの日本本部になるが、理事長の秋尾さんがまだ若かった1987年に、友人であるタイ人留学生の一時帰国に同行した。友人の実家はイサーンのウドンタニ県サーンコム郡の小さな村。秋尾さんが訪れると、村人や子供たちが集まってきた。座り込んで暮らし向きや教育事情などを聞いているうち、気がつくと膝の上に小学生の女の子がちょこんと座っている。

「あなたも中学校に行って勉強したい？」

秋尾さんがそう聞くと、少女は「うん」とうなずいた。

貧しい村の子供たちにとって、当時は中学校への進学などは夢のまた夢。小学校を出るか出ないかの年頃から働くのが当然とされていた。しかし、現実はそうであっても、そうした状況を打破しようとしないかぎり、貧しさから抜け出ることができないのではないか。秋尾さんは村人と話すなかで、子供たちの自立心を育てるためには教育の機会を彼らに与える必要があることを痛感した。

帰国して友人に声をかけると、41人から一人1万円のカンパが集まった。この資金を現地に送ったのがダルニー奨学金の始まりだ。

ちなみに、奨学金の名称のダルニーは、秋尾さんの膝の上に座っていた女の子の名前。そのダルニー・シーラオさん（32）は奨学金を得て進学し、大学卒業後は就職先としてＥＤＦを選んだ。一昨年暮れに結婚していまでは一児の母だ。ＥＤＦでは奨学金担当のスタッフとして、各地の学校関係者らと折衝する多忙な日々を送っている。

「誰も進学したくない」

奨学金の発足当初、原資となる寄付金集めは日本では順調に進んだが、タイ側で難題が持ち上がった。ある村の小学校で現地の調査員が6年生に「奨学金で中学校へ行きたいか」と聞いたところ、全員が「ノー」。誰も進学したくないという。家が貧しいので、中学校へ行くよりも家計を助けるために働いたほうがいいとの考えだった。

「それほど貧しかったんですね、当時は。なにしろ、村にようやく電気がつき始めたころでしたから」（秋尾さん）。

知らせを受けて現地に出向くと、集会所に親や子供など150人ほどが集まっている。秋尾さんは日本の歴史を引き合いに出し、窮状打開の活路を教育に見いだそうとした長岡藩の「米百俵」の話をしたあと、子供たちには「小学校を出るだけなら、これぐらい（手のひらを開いて見せる）の親孝行しかできないけど、中学校を卒業するとこんなにたくさん（両手をいっぱい広げる）できるかもしれないよ」と説いた。すると前のほうで聞いていた男の子が「おれ、中学校へ行きたい！」と叫ぶ。それに合わせるかのように、みんなが「は～い！」と手を上げた。

秋尾さんはその光景を目にして、スタートしたばかりのダルニー奨学金の将来に自信を持ったという。

30万人の就学を支援

イサーンの貧困地域で、貧しさを理由に中学校へ行けない子供たちの就学を金銭面で支援する。これがダルニー奨学金の趣旨であり、エリートを育成するのが目的ではない。だから奨学生の選考基準は、子供の成績ではなく、あくまで経済的な貧しさが基準だ。

公務員や村長などの子女は対象から外され、世帯年収が3万5,000バーツ以下であることが条件とされる。奨学生の選考委員には、各家庭の事情に通じている地元の教師や学区の教育支援部の関係者らが中心となっている。

寄付金の提供者（ドナー）からの中学生一人への支援金は年間2,000バーツ。このうち1,500バーツは奨学生に渡され、制服や教材費、文房具、交通費などに使われている。残り500バーツはＥＤＦの運営費に充当される。

ダルニー奨学金は、発足して5年後の1992年には奨学生が1万人を突破した。25年の実践のなかで、支援者総数は15万4,777人となり、イサーン地域の20県に広がる4,477校の延べ30万人の中学生に奨学金を無償で贈与してきた。ドナーには、奨学金が贈られることになった中学生の写真やアンケートの回答内容が証書とともに送られ、その成長ぶりがわかるようになっている。

奨学金の原資は日本とタイからの寄付金がほとんどを占める。寄付金総額は1996年以降、2,000万バーツ強で推移しているが、2011年は2,219万バーツになり、約1万4,000人に奨学金を贈った。このうち6,000人については日本からの寄付金で賄い、残りはタイの日系企業や日本人駐在員、また地場企業やタイ人からの寄付金で賄われている。（続く）

2010年12月の結婚式当日のダルニー夫妻と秋尾晃正・民際センター理事長（右）。花嫁の言葉は「私は今の仕事が大好きです。これからは仕事と家庭を両立させながら子供たちのためにがんばります」

Copyright(C) NNA All rights reserved. 記事の無断転載・複製・転送を禁じます

支援網、インドシナに拡大

1987年に発足したダルニー奨学金は、日本の民際センター（東京都新宿区）とタイの地域開発教育基金（ＥＤＦ）が中心となってタイ東北地方（イサーン）で実績を積み上げてきたが、これをバネにして1997年にはＥＤＦラオスを設立。ラオスの恵まれない小学生に救いの手を差しのべ、今年から支援対象を中学生にも広げている。2007年にはＥＤＦカンボジア、そして今年はミャンマーとベトナムにも奨学金のネットワークを拡大した。【ＮＮＡ主筆・大住昭】

現金を支給するタイでは、奨学金が家の生活費などに回されないために、生徒名義の銀行口座から教師との連署でのみ引き出せるようになっている。また、ラオスやカンボジアでは奨学金相当の制服や学用品などが現物支給されている。

民際センターの秋尾晃正理事長は、同センターが発行する『ダルニー通信』2012年夏号にダルニー奨学金創立25周年のメッセージを寄稿。四半世紀にわたる実践を振り返りながら今後を展望するなかで、民間の主体性を軸にした「民際」、貧困から抜け出す鍵としての「教育」、そして地域の平和を構築するための「メコン」の３本を軸にした活動を続けるとしている。

貧困家庭に生まれても教育の機会が与えられ、最低でも読み書きができるようになれば自立心が芽生え、そこから貧困の連鎖を断ち切る可能性が生まれる――メッセージには秋尾理事長が「教育」に込めた信念が伝わってくる。

祖母の養老金だけが頼り

タイのＥＤＦ事務局が奨学金申し込みの記載内容を調べたところ、両親の出稼ぎや離婚、また蒸発などで親と一緒に暮らすことができず、子供たちだけ、あるいは祖父母や親戚と暮らす奨学生の数は年を追って増えている。両親と暮らしていない奨学生の割合は、2007年の23.7%が10年には31.1%にはね上がった。

同居する祖父母が高齢や病気のため、子供が生活を支えるケースも少なくない。とはいえ、子供ができる仕事は農作業の手伝いなどに限られており、稼ぎもたかがしれている。やはり両親からの仕送りに頼るしかないが、イサーンのシーサケット県で祖母といとこ４人の計６人で暮らすエィラワット君（小学校６年生）の場合、生活費はこれまで月額1,500バーツ（約3,750円）の仕送りに支えられてきた。

しかし、昨年10月からの洪水で親が失業してしまったため、その送金も滞りがち。いまでは祖母に支給される月額500バーツの養老金だけが頼りという。子供ながらに生活苦の重圧と向き合わなければならないエィラワット君にとって、ダルニー奨学金なしに中学校にはとても進学できそうにない。

イサーンの貧困

では、イサーンはなぜこれほどまでに貧しいのか。

まず、自然条件としての土壌の問題がある。起伏のほとんどない土地は、総じてラテライト（赤土）でやせており、晴天が続けばカチカチに固まり、雨が降ればドロドロになる。これに加えて、例年のように干ばつで苦しめられる。かんがい設備はほとんど整備されていないため、雨水に頼るしかなく、農作物の収穫は不安定だ。農業生産性も低い。

イサーンの平坦な風景には雑木林があまり目に止まらないが、村の古老らによると、ひと昔前までは集落の周辺にはうっそうとした森があった。村人は森の恵みと水田からとれるわずかな米で暮らしていたが、そのうち木材の買い付け人がやってきて、森は見る間に丸裸にされてしまったという。1980年代からの開発の大波はイサーンの森林を丸呑みにしてしまったようだ。

そんな土地柄だが、イサーンの面積と人口はタイ全体の約３分の１を占める。農業以外にこれといった産業が発達していないため、住民の収入は北部チェンマイ北方の山岳民族と同様にタイ国内で最低だ。国家統計局が2011年に発表した調査結果によると、イサーンの世帯当たりの平均月収は１万8,217バーツ。国内最高のバンコク住民世帯の４万8,951バーツと比べると、３分の１余りにしかならない。1994年以降の統計でも、イサーンは他地域より大きく見劣りしている

電化で借金漬けに

大阪外国語大学の元学長で本紙に『タイ政治社会の潮流』と題するコラムを連載している赤木攻・東京外国語大学特任教授によると、1970年代末のイサーンでの生活経験からいえば、そこには相対的な貧しさはあったものの絶対的な貧困はなかった。所得水準は低かったが、母系家族を中心とした伝統と農業が大地にしっかり息づいていたという。

赤木教授によると、イサーン社会の変容は、80年代から急速に進んだ電化と道路網の整備を契機としており、それらが消費経済の普及と移動の容易さをもたらした。結果として、ほとんどの農家は、家電製品に代表される消費財の大量購入によって借金を抱えるようになる。

赤木教授が調査した農村では、世帯当たりの年間支出は電化前の80年当時の5,400バーツから電化後の

Copyright(C) NNA All rights reserved. 記事の無断転載・複製・転送を禁じます

96年には３万6,500バーツへと激増する。借金は雪だるま式に膨れ上がり、それを返済するために人々は離農してバンコクなどの都市部へ大挙して出稼ぎに行くようになった。

タイでは2002年から中学校も義務教育となり、学費は国が負担するようになったが、親は学校に行かせるよりも子供たちが家計を助けるために働くことを希望する。授業料が免除されても文房具や教材費のほか、制服や運動着の購入、また昼食代や交通費など、通学するためには多くの出費がかさむ。食うだけで精一杯の極貧家庭には、とても負担できるものではない。

ダルニー奨学金は中学生一人当たり年間1,500バーツと少額だ。それでも家庭の事情から祖父母や親戚らと暮らさざるをえない多くの子供たちにとっては、厳しい現実から離れて友だちのいる学校に通うことができる一筋の希望の光ともいえる。

一方で、イサーンの青年は総じて早婚だ。若くして子供ができる。どうやって育てるかの心の準備も経済的な余裕もないまま家庭を持つ。当然のこととして離婚が多い。夫婦が出稼ぎに行ったまま消息不明になるケースも少なくない。こうした要素も手伝ってイサーンはいつまでたっても貧困の連鎖を断ち切れず、貧困が再生産されている。

ブリヂストンの社会貢献活動

ＥＤＦはダルニー奨学金のほか、学校の施設支援も手がける。イサーン地域の学校では100人の生徒につき古い機種のコンピューターが２～３台しかない。このため企業から寄贈される中古機を学校に贈っている。また図書館の充実や清潔な飲み水プロジェクトにも取り組んでいる。さらには無農薬野菜の栽培や機織り、魚や食用カエルの養殖など、学校が主体となった１校１事業を支援したり、ドナー企業の希望に沿ったプロジェクトを推進するなど幅広い活動を展開している。

タイ・ブリヂストンから贈られた自転車に乗る子供たち
（９月３日、ナコンラチャシマ県のバーンプレン校近くで）

企業からの寄付ではブリヂストンの現地法人からが大きい。タイに進出したのは1967年と古く、その２年後にタイヤ生産を開始した。グループ企業の事業体は現在10社を数え、合わせて約１万人を雇用している。

タイブリヂストンの田村亘之社長（今年６月当時）によると、同社は20年前から教育重視の考え方に基づく活動に注力してきた。その活動はこれまで連綿と引き継がれ、いまでは教育と環境の２つの領域が大きな柱となっているという。

2006年からはＥＤＦとの協働で、「Rides the Future（未来に駆ける）」プログラムを展開。イサーンの恵まれない家庭の中学生に年間200台の自転車と３年間の奨学金をセットにして贈り続けている。贈呈する自転車は昨年までは地元のものであったが、今年からは自社製品による社会貢献との意味合いを込め、ブリヂストン製の自転車を贈ることになった。今年の寄贈式は９月３日と４日、イサーンの２県の学校で子供たちの満面の笑顔と歓声のなかで行われた。

陸前高田の学校と交流

日本の民際センターは、企業や個人に「リサイクルによる国際協力」を呼びかけている。書き損じはがきや使用済みのインクカートリッジ、古本、ＣＤなどで、書き損じの50円はがきの場合、換金すれば１枚36円になるという。ＪＸ日鉱日石エネルギー、キヤノン、沖電気工業など多くの企業が職場でのこうしたはがき集めに協力している。

書き損じはがきの収集を通したダルニー奨学金への支援の輪は全国規模で広がっているが、岩手県陸前高田市の市立第一中学校もその一つ。1997年からこの運動に参加してきた同校は、高台にあって津波での被災は免れたため、市内最大の避難所となった。

タイＥＤＦは東日本大震災の直後からこれまでの恩返しとして募金活動に取り組み、イサーンを中心にして集まった約130万円を今年４月に同校に届けた。この寄付金は、本来なら家庭から集められる学校集金の一部に回され、被災した家庭の負担軽減につながったという。

支援することは、支援されることでもある。陸前高田第一中学校の関係者は「書き損じはがきの収集とタイの子供たちへの支援はこれからも続けていきたい」と話している。（続く）

＜メモ＞
■地域開発教育基金（ＥＤＦ）
50 K.U.A. Building 3rd Floor, Phaholyothin Road, Chatuchak, Bangkok 10900 THAILAND
Tel:0-2579-9209-11 (Thai line)
Tel:0-2942-8538 (Japanese line)
Fax:0-2940-5266 Email:public@edfthai.org
■一般財団法人 民際センター
〒162-0801 東京都新宿区山吹町337
江戸川橋東誠ビル5
Tel:03-6457-5782　Fax:03-6457-5783

Copyright(C) NNA All rights reserved. 記事の無断転載・複製・転送を禁じます

支援活動、いまだ道なかば

ダルニー奨学金にとって、昨年はダブルパンチの年だった。日本の大震災とタイやカンボジア、ラオスなどを襲った大洪水。個人や法人のドナー自体が被災したほか、天変地異による心理的な影響は今年に入ってからじわじわと出ている。親の失業や仕送りの減額などにより奨学金を必要とする子供たちが急増する一方で、奨学金の原資となる肝心の寄付金が例年にもまして集まりにくくなっている。発足25年の節目を迎えたダルニー奨学金にとっては、まさに試練の年でもある。【ＮＮＡ主筆・大住昭】

タイでダルニー奨学金を運営する地域開発教育基金（ＥＤＦ）のオフィスは、バンコク郊外にあるカセサート大学の建物を間借りしている。応接室の天井からは雨漏りがするが、顧問の植田禮治さん（66）は「うちはＮＧＯ（非政府組織）なので、あんまりいいオフィスだと、ひんしゅくを買いますからね」と、笑いながら語った。もちろん、実際には家賃コストを少しでも抑えるためだ。

お手伝いおじさん

35人のスタッフを抱えるＥＤＦのなかで唯一の日本人である植田さんは、企業からの寄付金集めを担当するほか、雑務も買って出ており、「お手伝いおじさん」と自称する。

学用品の贈呈式で。中央が植田さん、右側がアヌチャートさん（５月29日、イサーンの学校訪問時）

大阪府堺市出身。松下電器貿易（現パナソニック）で中国貿易に従事したあと、タイ、台湾に長期勤務。退職後はインドネシアと中国の現地企業に勤め、2006年から東洋製罐のタイ法人勤務後、３年前よりＥＤＦを手伝っている。タイでの暮らしは駐在員時代を含めて通算12年になるタイ人大好き人間だ。

教育支援活動との関わりは、タイでのパナソニック勤務時に始まった。赴任したてのころ、タイ人の同僚が寄付を集めていたので軽い気持ちで1,000バーツ（当時は約5,000円）を出した。後日、寄付先の学校の校長から丁寧なお礼の手紙をもらったが、そのなかに３枚の写真が同封されていた。植田さんの寄付金で学校では特別な給食が出され、１枚の集合写真には生徒たちが笑顔で手を振っていた。

「自分の小遣い銭で、子供たちがこんなに喜んでくれている！」

感銘した植田さんは、その後タイを離れてからもパナソニック時代のタイ人の元同僚らとフレンドシップ・クラブ・ファンド（ＦＣＦ）を設け、20年にわたって教育支援の活動を続けてきた。このなかには８年前のインド洋大津波で両親を亡くした子供たちへの支援や、バンコク北方のアントン県にある寺院が建てた学校を手助けしている。この学校には、タイ北部のミャンマー国境近くの村からバンコクに出稼ぎにきた親が、里帰りする際に置き去りにした子供たちが大勢身を寄せている。植田さんがＥＤＦの諮問委員となり、顧問として働くようになったのには、ＦＣＦでのこうした活動歴が背景にある。

アントン県の支援先では、捨て子は年を追って増える一方だ。こうした状況を直視すると、問題は貧しさだけで片付きそうにない。親の愛情の希薄さや社会制度上の宿命的な悲劇など、貧困以外にも子供たちの心を傷つける要因はたくさんある。植田さんはこのため、「教育支援とともに子供たちの心のケアにも真剣に取り組まなければならない」と話している。

「微笑の国」の闇

電気はなく、水は遠方から汲んでこなければならないタイの東北地方（イサーン）のへき地。そうした極貧地域に何度も足を運んでいる植田さんに言わせると、バンコクに出てきて風俗街で働いているイサーンの女の子たちは、ある意味、まだ幸せなほう。「悲惨なのはカネで売り飛ばされたり、無理やり乞食をさせられている子供たちです」と語る。

2002年に出版され08年には映画化された作品、『闇の子供たち』（梁石日著）は、タイの貧困地域での幼児売買のほか、バンコクやチェンマイでの児童売買春、また児童臓器移植など重苦しいテーマを扱っている。ページをめくるたび、むき出しの暴力と児童虐待のシーンがこれでもかというほどに描写される。フィクション作品ではあるが、「微笑の国」の裏側に広がる闇に鋭く切り込んでいる。

10年11月にはバンコクのバーンコーレームにある通称パイグン寺の遺体安置所から、ビニール袋に包まれた胎児の遺体が多数発見されて社会に衝撃を与えた。

Copyright(C) NNA All rights reserved. 記事の無断転載・複製・転送を禁じます

その数、じつに2,002体。付近の違法医院やニセ医者から火葬の依頼を受けて預かっていたもので、焼却炉が故障してからはあまりの多さにお手上げとなり、遺体のまま6年近く放置されていたという。不法な人工中絶が横行するタイ社会の暗部を浮き彫りにするニュースでもあった。

洪水が寄付金に影響

ＥＤＦ事務局スタッフで植田さんとチームを組むタイ人スタッフのアヌチャートさん（32）によると、日本とタイで昨年発生した大震災と洪水により、今年の寄付金は例年に比べて少ない。タイではこれまでのドナー企業が洪水で被災した事情もあって、寄付そのものを見合わせたり減額したりするケースもあるという。

日本では大震災に見舞われた影響のほかに、この間のタイ経済の発展により、タイをみる日本の目が変わりつつある。タイはもはや、援助が必要な途上国のレベルを卒業したのではないか。こうした見方が一般的になるなかで、日本からの支援対象がラオスやカンボジアなどに移行しているといった事情もある。

ところが、タイでは所得格差が年を追って拡大しているのが実情だ。貧困は都市部でもイサーンのような地方でも社会の最底辺でとぐろを巻いている。

ＥＤＦはこうしたところから、タイ進出の日系企業や駐在員、また地場企業やタイ人からの支援を以前にも増して求めることが必要になった。

日本で洪水緊急募金

ＥＤＦ事務局がタイ政府の発表をもとにまとめたところによると、昨年の洪水被害は総額で3兆5,000億円。700人余りの犠牲者を出し、失業者は約100万人に上った。また冠水した学校と工場は2,600校、930工場になった。

ダルニー奨学金の日本本部に当たる民際センターは、タイの大洪水を受けて日本国内で特別支援の募金活動に乗り出し、500万バーツ（約1,250万円）を集めた。この寄付金はイサーンのほか、中部アユタヤやバンコク北郊パトゥムタニなど洪水被災地域の学校に贈られた。ＥＤＦは一方で、6月にアユタヤの111校の被災校に図書室用の本を寄贈している。

イサーンでは南部の各地で洪水が発生した。家屋や農地、学校に被害が出るほか、子供を村に残して都市部の工業団地などに働きに出ていた多くの親が洪水による工場被災により失業してしまう。この結果、収入が途絶え、家族への仕送りも滞りがちだ。洪水によって奨学金を必要とする生徒が急増しながらも、奨学金の原資となる寄付金が減少するという状況に直面している。

ＥＤＦのサンペット専務理事は『ダルニー通信』2012年春号のなかで、「洪水による失業者の6割はイサーンからの出稼ぎ労働者という統計もある。その子供たちが収入を得るために学校をやめてしまうケースも少なくない。しかし、義務教育すら終了できない彼らの将来の選択肢は限られ、貧困の連鎖から抜け出すことができなくなる。洪水で子供たちの夢や希望までもが流されないように、なんとか彼らの就学を支援したい」と述べている。

幸福のおすそ分けを

「はっきり言って、本当に貧乏な子供は救えていない。食うや食わずの家庭の子供は学校に来ないし、来れないのが現実だ。これが、われわれが活動していて覚えるジレンマです」

タイの恵まれない子供たちへの教育支援に長年携わってきた植田さんは、これまでの活動を振り返るなかで、このように語る。救済の手は極貧層まで届いていないとの認識だ。

それでも活動は地道にこつこつと進めるしかない。ＥＤＦは昨年末に小さく折りたためるパンフレットを作成したが、その表紙には木造校舎の廊下の手すりの前でニッコリしている女生徒の写真が使われている。キャプションは「こんな笑顔をみんなの力で」。以前は暗くてみじめな表情の子供の写真が多用されてきたが、植田さんらは発想を転換。女の子の白い歯に「あなたのちょっとした支援で、子供たちにはこんなに明るい笑顔が生まれるんですよ」とのメッセージを込めた。

ＥＤＦのパンフレット

光が弾けるような、混じりっけのない子供たちの笑顔。2010年2月に亡くなった作家の立松和平さんはその前年の9月、ダルニー奨学金を通して支援しているラオスの子供に会いに出かけた際に、そうした笑顔に包まれた。帰国後に『通販生活』に寄せた一文には「たくさんの笑顔に囲まれて、私も幸せだった。宝物のような幸福のおすそ分けを、確かにもらったと思った」と記している。

植田さんに今後の活動について聞くと、こんな答えが返ってきた。

「一部の金持ちが恵まれない人のためにお金を出すといった時代はもはや終わった。これからは多くの人が自分たちのやれる範囲で自発的にやる。何もかもはできないけれど、誰かのために何かひとつぐらいはできるかもしれない。そう思って、寄付やボランティア活動などへの参加を通して多くの人が喜びや生き甲斐を見いだせるようにしたいですね」

発足して四半世紀を迎えたダルニー奨学金。日本とタイを中心に多くの人の善意に支えられながら、貧困からの脱却と自立を目指した教育支援活動は、そのネットワークをインドシナ各国にも広げつつ、いまだ道なかばにある。（了）

Copyright(C) NNA All rights reserved. 記事の無断転載・複製・転送を禁じます